（第２号様式）

神奈川県教育委員会教育長　殿

令和６年３月 31 日

県立足柄高等学校長

令和５年度　学校評価報告書（目標設定・実施結果）

	視点	４年間の目標（令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価（中間報告）		学校関係者評価（11 月６日実施）	総合評価（３月 15 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1	教育課程 学習指導	①生徒が自ら課題を発見し、探究する意欲を高めることのできる教育課程の編成や特別活動の精選・充実に取り組む。学校行事や生徒会活動等の精選と充実を図り、生徒の主体的な活動を支援するとともにそのユニバーサルデザイン化をはかる。 ②生徒の主体的な学びを引き出し、個々の生徒に応じた教科指導体制の構築と評価法の研究を行い、組織的な授業改善に取り組む。	①新教育課程に基づいて、課題解決型・探究型の授業実践ができるよう、組織的に研究をすすめる。 生徒会行事をはじめとする特別活動をコロナ禍前の状態に戻し、生徒の主体性を育てる機会として一層の活性化を図る。 ②ICT の特性を理解し、場面を踏まえて活用することで、主体的・対話的で深い学びを引き出し、生徒が「授業における充実感」を感じられるようにする。	①発問や授業展開を中心に見直し、組織的に授業研究を行う。地域貢献やボランティアなど校外活動への参加を促し、委員会活動を活性化させ、生徒が行事等を主体的、自主的に運営する力を育む。 ②ICT 機器について活用しやすい環境整備や取扱い方法の紹介を行い、他校の先進的な ICT 利活用授業実践例を参考にしつつ、効果を検証する。 スタディサプリを活用して日常的な学習習慣を定着させ、個別最適化型の学習の実践に挑戦する。	①研究授業およびその後の教科会を活用して組織的な授業改善が行われたか。 年間の学校行事・部活動等の取組状況について、コロナ禍前からどのような点が工夫・改善されたか。 ②職員や生徒がスムーズに機器を利用することができたか。 生徒による授業評価の「授業の充実感」「生徒主体の授業の工夫」「自分で学習」の項目において、数値が上昇したか。	①６月美化デーでは部活動生徒 80 名の参加で自治会と連携した活動を行った。文化祭は４年ぶりに一般公開での開催となり、2,000 人以上の来場者を得た。 ②Chromebook 保管庫の配置や貸出し方法の変更および教員・生徒それぞれの BYOD 利用マニュアルを作成した。 ICT 利活用研修会や情報セキュリティ研修会を行うなど、効果的な ICT 利活用推進に向けて取組を進めた。 スタディサプリについては、４～８月の段階で動画視聴時間数が昨年１年間の取組量の２倍を超えるなど、多くの生徒が熱心に取り組んでいる。教員のスタディサプリを通じての課題配信も増えている。	①11 月に実施される年次研修の研究授業に合わせて授業見学週間を新設するなど、組織的な授業改善に向けての取組を推進していく。 文化祭後アンケートでの様々な意見・要望を活用し、実行委員会をはじめ生徒の主体性、自主性の活用や教職員の役割分担、企画の見直し等について、検討していきたい。 ②一人一台端末を日常的に活用できている教科は着実に増加している。今後、活用授業例を蓄積し、活用の工夫を継続する。 スタディサプリについて、昨年度は２学期以降の取組が鈍化してしまったため、１学期の良い状況を継続できるように課題配信および声掛けを継続する。	①授業研究の方法については、年間で生徒からの評価が高かった授業を実際に行ってもらうという形もある。 総合的な探究の時間については、担任に一任するのではなく、学校全体で行っていくべきである。 授業では生徒同士の交流があり、ICT を取り入れた展開が多く見られた。アウトプットを重視した授業を推進してほしい。 ICT を用いた授業では教材づくりに苦労があると思う。教員同士の教材づくりの情報交換や研修は行っているのか。 ②スタディサプリについては、学習時間以外の要素からも効果を検証すべきである。課題探究・解決型学習については、「何が課題か」が分からない生徒が多いので、その解決が大切ではないか。	①1・2 年生が新カリとなり、授業においてもグループワーク・ペアワーク等を取り入れることが増えた。ICT 機器の活用にも教員・生徒ともに慣れてきており、一人一台端末を用いて資料を活用したりグラフを作成したりする授業が増えている。英語科では ICT 授業の教材をドライブを通じて共有している。 ②スタディサプリの積極的活用により、学習時間が伸長している。高い進学目標を掲げる生徒に向けて「スタサプ部」発足を予定している。	①Ｒ６年度は全学年が新カリとなるため、更に指導力向上に向けた取組を進めたい。 更に文化祭を生徒主体の魅力あるものとし、来場者を増やしたい。レクレーション的な体育祭を６月に実施し、生徒の充実感を高める。 ②Chromebook 利用のマニュアルを提供し、端末を利用する機会を増やす。 Chromebook の保管と貸し出し方法の工夫をしていく。 スタディサプリの効果測定を深め、意欲と主体性を引き出す手法・場面を模索する。確認テストや到達度テスト後の手当てを厚くし、個別最適化した学習の質の向上を進めていく。
2	生徒指導・支援	①生徒指導と生徒支援の一体化を推進し、教育相談体制の充実と外部連携を進めるとともにユニバーサルデザイン化を図る。 ②部活動の活性化を推進し、協調性と責任感の涵養を図る。	①各学年が生徒の課題を的確に把握し、個に応じた指導と支援が一体化した、きめ細やかな生徒支援を進める。 ②生徒が部活動を通して責任感や連帯感、達成感を得て、心身ともに成長できるように、部活動の活性化・加入率の向上をはかる。	①各種会議で生徒の状況や課題、ニーズ等の情報を共有し、SC・SSW とも協力しながら迅速かつ適切な支援を行う。スケアードストレート方式によって交通安全への意識を高める。 ②部活動費や環境整備面での支援を継続する。部活動実績の積極的な PR を行い、活動の活性化を図るとともに、学校説明会や部活動体験見学会、Web ページなどを通じて中学生向けに周知して次年度の活動につなげる。	①各種会議での情報共有や学習環境の整備を通じて、個々の生徒に応じた支援を行えたか。学校生活や交通安全に関するアンケート結果で意識の向上が見られたか。 ②部活動への支援はできたか。担当Ｇと連携を図り、中学生への発信ができ、部活動関連行事での参加率や満足度が高まったか。	①「かながわ子どもサポートドック」では、生徒の実態に合わせた支援を SC・SSW と協力しながら実施することができた。交通安全については、定期的な立ち番指導を軸に、スケアードストレート方式の交通安全教室を実施する等、学校行事の充実を図った。②部活動加入率が 59.8%と６割を切った一方で陸上競技部や弓道部、歴史研究部が上部大会への出場を果たした。部活動ＨＰの更新や部活動体験・見学会の実施で、来年度入学生への啓蒙を進め、中学生対象の部活動体験には 84 名の中学生が参加した。	①SC・SSW との連携については、教育相談 CO に業務が集中しないような業務分担が必要。 交通安全に対する意識について、ＰＴＡも含めた情報共有が必要。自転車通学者のヘルメット着用率向上のために、実態調査を実施する。 ②部活動活性化のために、経済的な支援や環境整備を継続する。 部活動見学会を重要な機会と捉え、生徒会Ｇと一層の連携をとり、部長会を通じて受付の混雑を改善するなど、開催方法を工夫したい。	①「かながわ子どもサポートドック」は自分から言い出せない生徒には良い取り組みである。生徒が自分の気持ちを把握するという側面もある。うまく活用してほしい。 ②部活動は、全体として地域移行が進んでいる。勝利主義ではなく、基礎体力をつけるための部活動としての捉え方もある。	①SSW が各校配置になった効果は大きく、課題を抱えた生徒の情報を教員間で共有するだけでなく、社会的な支援体制につなぐ手立てを得ることができた。「かながわ子どもサポートドック」によって教員側からのプッシュ面談が実施でき、生徒の課題解決に向けて有意義であった。実施に当たっては教育相談コーディネーターの負担軽減に向けて、校内での実施体制改善が求められる。 ②部長会の協力により広報写真の撮影ができた。	①SSW の活用を広げ、生徒や家庭の支援につなげる。スマホ講座は早い時期に実施して効果を高める。交通安全については自転車のヘルメット着用の推進や実演的な交通安全教室の開催を予定している。 ②部活動加入率を上げるために部としての魅力と特色を作る。 部活動体験見学会は令和６年度は廃止とするが、説明会やオープンスクールでの見学会を充実させたい。

	視点	４年間の目標 （令和２年度策定）	１年間の目標	取組の内容		校内評価（中間報告）		学校関係者評価 （11 月６日実施）	総合評価（３月 15 日実施）	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
３	進路指導・支援	①生徒自身が考え、体験をするなど、主体的に取り組むキャリア教育を計画的・段階的に実践する。 ②「実践推進校」として、生徒一人ひとりの社会接続を実現するために、ていねいな進路支援を行う。	①生徒一人ひとりの希望進路の実現に向け、生徒及び保護者との綿密な情報共有を図る。説明会や進路情報の発信を細やかに行い、生徒の主体的な進路実現を促す。 ②特別募集で入学した生徒の社会接続に組織的に取り組む。	①生徒が自らの進路開拓に挑戦する姿勢を支援し、生徒及び保護者との情報共有や進路データの有効活用、多様な入試制度に関する的確な情報提供を図る。 ②３年間の「進路実践」を中心に、生徒の自己理解を深めさせ、個々の希望に応じて幅広い実習・体験先の開拓を行う。	①生徒の進路目標が明確になり、安易な進路選択とならないように、1 年生には意識付け、２年生には希望の絞り込み、３年生には希望進路実現の支援ができたか。 ②系統的な授業展開や保護者への説明会等を通して、特別募集生徒の個々の希望を踏まえた社会接続が実現できたか。	①３年生には、受験形態に合わせたガイダンスを複数回実施し、生徒自身が進路希望を明確化・具体化できるよう支援した。１・２年生には、外部模擬試験や大学訪問（２年生）を実施し、学習意欲の喚起に努めた。 ②進路Ｇと各担当者が連携し、組織的に指導にあたった。前期実習 A・B・C や就職に向けての実習を企業と連絡を取りながら計画し、支援を行った。	①大学入学共通テスト申し込み者数が少なかった。一般受験も視野に入れたガイダンス等を一層充実させ、生徒の意識を高めていく必要がある。また、入試の多様化に伴う情報共有を校内のみならず、地区進路指導協議会等を通じて進めていく。 ②蓄積してきた「進路実践」の取り組みを継承し、引き続き丁寧な進路支援を行う。支援する校内体制の改善に力を入れていく。	①進路に関しては、小中学校と連携してキャリアパスポートの活用を促したい。 キャリア教育支援に関して、体験入学と実際の学習とのギャップに悩んで技術校を中退する生徒もいる。教員と技術校との連携が必要である。 教員側が技術校での研修に参加する等の取り組みが考えられるのではないか。 ②特別募集生徒の進路に関しては、インターンシップだけでなく、大学紹介も積極的に行うべきだと思う。	①総合型選抜、学校推薦型選抜においては、全職員で小論文対策や面接指導を行い、生徒の進路希望に沿った成果を上げることができた。 一般受験に向けて意欲と学力を高め、目標達成を目指す生徒を増やしていきたい。 ②特別募集生徒の進路開拓については本人の希望と適性を充分に踏まえ、多くの可能性を探っていく。	①１年生の内から視野を広げられるように、東京等の大学見学や進学説明会を実施する。 ②２年生の内から実習を経験させ、自身の適性を確認できるように支援する。
４	地域等との協働	①地域に情報発信するとともに生徒の地域理解と地域貢献を通じ、連携と協働を推進する。 ②地域と連携して、地域防災を推進する。	①本校の行事や地域貢献に関する情報を Web ページ等で発信する。 ②防災関係のマニュアルの周知を徹底するとともに地域防災に寄与できるよう南足柄市と昨年以上に連携していく。	①広報内容の充実を図り、Web ページ等のデジタルコンテンツに加えて地域の実態に合わせた方法で本校の取組みを分かりやすく発信する。 ②紙上防災訓練(DIG)や、火災・地震想定の避難訓練を実施するとともに、地域への協力体制を整えるためにも内容を充実させる。	①発信方法が工夫され、本校の取り組みに対して昨年度以上に地域からの理解と協力が得られたか。 ②近隣地域との連絡を密にし、防災体制の整備を進められたか。実際に即した防災訓練が実施できたか。	①部活動の Web ページについて、顧問対象に作成講習会を実施した。6 月にパノラマ写真ツアーを Web 上に立ち上げ、X で PR を行った。 ②10 月に近隣自治会および南足柄市役所の防災担当者を招き避難所開設訓練を実施する。地域の避難所として検討すべき点や、物品保管場所・設置方法の確認など、準備をしておく。	①様々な発信方法を連動させて広報の効果を上げていきたい。 ②避難所開設訓練は、本校生徒のための訓練と、地域住民の避難所開設のための市と住民の意見交換の場とするという２つの目的があるが、市と地域住民との意見交換は市が中心となり実施すべきと自治会から指摘を受けた。今後の進め方を検討していきたい。	①地域との協働については、引続き積極的に情報を交換してほしい。 ②学校の安全管理については、バリアフリーチェック等を生徒と一緒に行っても良いと考える。 避難所開設訓練に関しては、学校に任せきりではなく、自治会からも市と密に連絡を取っていく。	①中学校訪問や学校説明会において本校の魅力や特色を説明した。 学校 HP にて 360 度校内ツアーの配信、文化祭紹介動画の X 配信など、視覚的効果を高める工夫を行った。 ②避難所開設訓練を自治会と市との具体的な協議を深める機会にすることができた。市の防災備蓄品の保管等、本校に期待される役割について、職員にも周知していきたい。	①パノラマ写真にはインフォメーションに動画を入れて更新した。さらに動画を効果的に利用し、中学生の関心を引き付けたい。 ②PTA 広報紙を自治会の回覧に入れる等、防災以外での情報共有も行いたい。 総合的な探究の時間で地元企業との連携を深め、課題発見と探究の力を育成したい。6 月に地元企業による講演会を予定している。
５	学校管理 学校運営	①学校全体で教育環境に対する課題を共有し、組織的・計画的に改善していく体制を整える。 ②不祥事防止に努め、実効性のある組織的な取り組みを行う。	①業務内容の見直しと職場環境の整備を推進し教職員の本来業務への対応時間を確保する。 生徒の生活環境を整え、安全でストレスの少ない学校生活が送れるよう、配慮する。 ②不祥事防止研修を継続的に実施し、全校体制での防止策強化に取り組む。	①従来の業務に加えICT関連などを含めた業務の総量を勘案し個人に頼らない仕組みづくり、業務の整理と手順の改善を図る。 生徒の机、椅子など生活用品の管理・補充の体制を整える。 ②毎月の職員会議後に不祥事防止会議を開き、時期に応じたテーマで職員全体に注意喚起するとともに、個々に自己点検を行う機会とする。	①企画会議を通じて業務総量の削減や業務遂行手順の見直しを実行したか。 事務室と連携を取り、机や椅子などの入れ替えを適切に行ったか。 ②場面に応じた注意点や改善点の例示など、具体的な不祥事防止を実践できたか。	①行事の精査、グループや学年業務の見直しを全職員の課題とし、議論を深めた。９月末時点では、体育的行事の見直しに向けて生徒会 G と体育科との検討チームを立ち上げ、担任制度では担任とサポート担任の複数担任制の新設を決定した。 備品に関しては、全 HR 教室に鍵付きロッカーが年末までに入る予定。教室のドアも順次修理されている。 ②月毎にテーマを設定した不祥事防止研修を実施するとともに、毎朝の打合せで季節や機会に沿った具体的な注意喚起を行い、不注意による事故等を防止した。	①グループを超えた協議の機会、職員の人数や経験のバランスをとることが課題となる。働き方改革の実践に向けて職員の意識は高まり、各グループから具体的な改善案が出されている。 生徒用の机・椅子に関しては、特別教室の物品の老朽化もあるので、次年度以降は、毎年、少なくとも１クラス相当数は予算計上していく必要がある。 ②日常業務での気づきや違和感を放置せず、対人・対物両面で丁寧な対応を継続する。不祥事防止に役立つアイデアを広く取入れ、全職員が自分事として捉える環境を作る。	①学校管理に関しては、外部からのイメージもあるため、非常に大切である。引続き行ってほしい。 行事の削減も必要だろうが、生徒を主体とした行事は大切だと考える。	①新たな体育的行事の実施に向けてプロジェクトチームを立ち上げ、令和６年度６月の実施に向けて計画を進めている。 担任制の在り方の見直しを行い、グループや学年編成をスムーズに進行した。 ②面談や資料を基に不祥事防止の意識を共有し、各自の固定観念や感覚によらない公正な言動を促した。不断の注意で事故防止と働きやすい職場環境づくりを継続していきたい。	①サポート担任活用の検証を進め、生徒と職員双方に有効なあり方を探る。 生徒が自分の学校を好きになるような取り組みを継続する。 生徒更衣室やトイレの衛生管理を推進し、学校生活の質を高める。 ②不祥事防止研修会において、ヒヤリハットの経験談や県の不祥事防止動画の視聴など、印象に残る取り組みを実践したい。